

## 令和 6 年 5 月の解説（週間天気予報）

### 【5 月の天候状況】

上旬は、天気は数日の周期で変化した。全国的に低気圧や前線の影響を受けにくく、高気圧に覆われやすかったため、旬降水量は北日本太平洋側と東・西日本日本海側で少なく、旬間日照時間は北・東日本日本海側、北・東日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった。一方、期間の中頃には北日本付近を低気圧が、北・東・西日本付近を前線が通過し、全国的に曇りや雨の所が多くなり、西日本太平洋側を中心にまとまった雨が降った日があった。気温は、期間の中頃を中心に全国的に暖かい空気に覆われ、平年を大きく上回った時期があった。一方、期間の終わり頃には低気圧通過後に寒気が流入し、西日本を中心に北・東日本でも気温が平年を大きく下回った。このため、西日本で旬平均気温は低かった。また、7 日から 8 日にかけて北海道地方で雪が降った所もあった。沖縄・奄美では期間を通して暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は高かった。

中旬は、日本付近は低気圧や前線と高気圧が交互に通過し、天気は周期的に変化した。低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込みやすかった。一方、低気圧や前線の後面には寒気が流れ込む時期もあった。旬平均気温は、寒気の影響を受けにくかった北日本でかなり高く、東日本で高かった。北日本では、旬平均気温平年差が $+3.3^{\circ}\text{C}$ と、1946 年の統計開始以降、5 月中旬として 1 位の高温となった。旬降水量は、低気圧や前線の影響を受けやすかった北・東日本日本海側と東日本太平洋側で多かった。一方、高気圧に覆われた時期もあったことから、旬間日照時間は西日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。

下旬は、北・東・西日本では天気は数日の周期で変わった。27 日から 28 日にかけては、低気圧や前線の影響で、東・西日本を中心に記録的な大雨となった所があった。このため、旬降水量は東日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側と北・西日本日本海側で多かった。また、旬間日照時間は北・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なかった。一方、21 日頃に梅雨入り（速報値）した沖縄・奄美では、梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、前線の活動が活発となった 21 日から 22 日にかけてと 28 日には大雨となった所があった。このため、沖縄・奄美は旬降水量がかなり多く、旬間日照時間がかなり少なかった。特に旬間日照時間平年比は 41%で、1961 年の統計開始以降、5 月下旬として 1 位の寡照となった。旬平均気温は、暖かい空気が流れ込む日もあったため、東日本と沖縄・奄美で高かった。

### 【5 月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7 日目平均)は、例年値（注）よりも 6 ポイント高い 79%となった。地方別の適中率では、近畿、中国、四国、九州北部南部地方で例年値を大きく上回った。最高気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値よりも  $0.4^{\circ}\text{C}$  小さい  $2.3^{\circ}\text{C}$  で、すべての地方で例年値よりも小さくなった。また、最低気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値よりも  $0.2^{\circ}\text{C}$  大きい  $2.1^{\circ}\text{C}$  で、北海道、東北、関東甲信では大きく、中国、九州北部南部で例年値よりも小さくなった。

（注）例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

### 【7月の週間天気予報の利用にあたって】

7月は、梅雨前線の活動が活発になったり停滞したりすると大雨が発生することがあります。平年では台風の接近数が増え、前線にも影響を与えることもあります。一方で、前線の影響が弱まり高気圧に覆われたときには高温となることもあります。最新の週間天気予報等で、大雨への備えや熱中症予防行動に役立ててください。平年の中旬～下旬に、九州南部から東北地方にかけて梅雨明けとなります。しかし、梅雨明けの時期は年によって違いがあり、梅雨明けが遅れると、日照不足とともに長雨や低温により農産物の生育に影響が及ぶことがあります。2週間気温予報や早期天候情報を活用するほか、週間天気予報で曇りや雨の日が予想され、平年よりも気温の低い日が続く場合には、早めの対策を取るなどしてください。